

安達太郎

二本松市

昔、田地でんちが岡おかに安達太郎という人が住んでいました。この奥方おくがたは飯坂城主佐藤氏の娘照姫てるひめというとてもきれいな人で、四歳になる子供もおり平穏へいおんな暮らしをしておりました。

この頃、京都から派遣はけんされた多賀城たがじょうの国司こくしは色好みで、国内の美女を我がものにしようと、常に非道ひどうをして困らせておりました。そして、飯坂城主佐藤氏に「田地でんちが岡おかの安達太郎の妻はおまえの娘で、たいそう美人と聞いた。その娘を私にくれ。」と差し出しを命じる無理難題むりなんだいを申しつけたのです。

佐藤氏は、思いあまり、婿むこを殺して、娘を差し出すほかはないと考えて、太郎夫婦には自分が病氣いづわと偽いつわつて、二人を飯坂城に招いたのです。照姫の付き添いの賢い腰元こしもとが謀はかりごとを見破り二人に危急ききゅうを知らせたので太郎は大いに驚き、照姫を連れて帰ろうとしましたが、すでに田地でんちが岡おかは多賀城の家来けらいたちによつて占領せんりょうされてしまっていました。

そこでやむをえず、安達あだた太良山たらやまの山奥やまにしばらく隠れ潜ひそんでいました。やがて都に出た安達太郎は、この国司の数々の悪行あくぎょうを都の役所に訴え出たので、国司は流罪るざいの処罰しよばつを受けました。

時が過ぎ、安達太郎は再び田地でんちが岡おかに戻り安達の郡司ぐんじとなりました。

この話は、畠山氏はたやま三代目の畠山国詮くにあきら（幼名大石丸）が幼少のころの一つの伝説であるともいわれています。伊達行朝だてゆきとも事曆じれきによれば、この田地でんちが岡おかを「国司館こくしだて」と呼び、国司北畠頭家きたばたけあきいえが居館きよかんしていたとも伝えられています。さらに源頼朝みなもとのちかともの奥州平泉征討おうしゅうひらいずみせいたうの時には、小野田藤九郎おののだとうく（安達盛長あだちもりなが）も居館きよかんし「殿地でんちが岡おか」とも呼んでいましたが、今は田地でんちが岡おかといわれています。